

資料涉猟余話

その9

下伊那教育会館の一室で下伊那史編纂にかかわる仕事をしていると、時々古文書類や古文獻、時には掛軸までもが持ち込まれて、解説や真贋鑑定を求められることがある。

「錦宝庭訓往来」「男重宝記大成」「高僧和讃」や大正四年佐々木高明著「永代宝曆神機開発大雑書大成」など

太宰春台書簡との邂逅

今牧 久

四月末のある日、ひとりのご婦人が古い文獻類が詰まった段ボール箱を持参され、「こんなものが昔からあるのだが若い者は関心がないし、始末しちゃうていいものかご意見を伺いたい」と尋ねてこ

られた。箱の中を拝見すると、「商売往来」「錦宝庭訓往来」「男重宝記大成」「高僧和讃」や大正四年佐々木高明著「永代宝曆神機開発大雑書大成」など

一本が気にかかり、「もしや」と思い、しばらく預かることにした。後でゆっくり判読して、私なりに真贋を確かめたいと思ったからである。

春台が九歳の時、過失により牢人となった」とある。この書簡の差出人「弥右衛門」は春台の通称である。春台は県歌「信濃の国」にも謳い込まれた信州を代表する人物で、飯田人の誇りとする偉人であることはよく知られ

ている。萩生徂徠に入門し、貧困と病軀に耐えつつ中国古典を比較検討し、絶えず理想の詩文を追求し、政治論では「経済録」等先進的な論述の数々を世に残し、経学の分野では徂徠学を代表し師を越えたとまで称えられた市井の偉大な儒学者である。

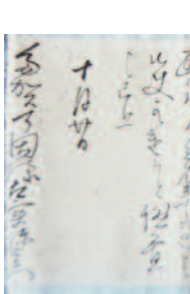
能筆家としても有名な春台の掛軸は何度か見たが、書簡は初めてで難解である。解読の助けにと教育会館市村文庫の羽生永明遺稿を始め、太宰春台論のいくつかを学習する中で、宛名の多賀了因が春台の門人であることがわかってきた。また、文中に幕府の儒官室



太宰春台

分厚い刊行本もある。「お宅の先代のどなたかが勉強なさった証として、捨てないで保管なさってははどうですか」と助言してお帰りいただいた。それらの古文獻に混じって「春臺太宰先生尺牘」と銘打った桐箱入りの巻物

表装されている。太宰春台を「国史大辞典」で調べてみると、「江戸時代中期の儒学者、名は純、字は徳夫、通称は弥右衛門。春台は号で、書齋を紫芝園と号した。：春台の父言辰は、信濃国飯田の城主堀氏の家臣となり、



書簡の冒頭部と末尾

「孔子家語増注」の発刊が資金難で滞って苦心していることや、將軍秀忠の執政本多正信の「本佐録」を貸与する約束なども読みとれて興味深い。特に詩文の校閲に際しては一字一句もゆるがせにしない厳格さが随所から読みとれ、この書簡は春台の真筆に違いないと確信を深めた。

この巻物は四年前に亡くなった骨董好きのご主人が入手したものであるというが、その経緯は不明である。それにしても「捨てないで、その中に意外な真実、本物が潜んでいる」を実感した体験ではあった。